

足を洗うので、水をもらいたいと申し出たので、水を器に入れて持って行ったところ、足を洗った水を捨てるのがもつたいないと、その水で顔をプルンプルン洗い始めた。これを見ていた坊主たちは、「足を洗った水で顔を洗っているわ」とワアツと笑った。

「俺が足を洗った水で顔を洗ったのがそんなにおかしいか、しからは一間聞くぞ。尻を洗う湯に入つて顔を洗うとはいかに」と禪問答を所望したところ、だれも返答できなかったそうである。

これに驚いた坊主どもは、なんぼ偉いか分からないと思ひ、丁寧な奥に通したところ、一目求願に見られた祐天はちぢみ上がつて、畳一畳へり下つて手をついて、「御身との誓いを破り、かかる大寺の法丈になつて申しわけもござらん」とあやまつた。求願はその事については少しもふれず、「御身はかゝる大寺の主になつてよかつた」といつたきりで祐天を少しもせめなかつた。

いろいろのもてなしを受け、いろいろな話をして一晚語り、翌朝ねんごろに別れを告げた。求願は心の中でつぶやいた。「祐天の心の中はどうだろう。自分の心を偽つて仏に嘘をついて、仏の前に手を振つて出られるか。俺は名もない乞食坊主だが、仏の前には手を振つて出られる。自分の心を偽つて何が良いことがあるものか、お前はそれで良いと思つてゐるかも知れないが俺は駄目だ。領地をくれる、金をくれるといわれても、たとえ首の座に座らせられても、そんなことには驚く俺ではないぞ。一旦仏に願掛けした俺の気持は、決して何物にも動かされないぞ。富士の山を動かしたとしても、俺の心は動かないぞ」と祐天をしり目にまた滝に帰つて来た。

求願はその後、何年滝に住み、どここの土地で死んだのかははつきりしない。滝屋敷に残された、百八